第44回民放労連全国女性の集い in 松島

このままでいいの？ ニッポン マスコミ 私たち

四四回目となる民放労連全国女性の集いが、5月19、20日の二日間、日本三景の一つ宮城県・松島の美しい景観に見守られながら開催されました。しっとりと松島をぬらしていた雨も、開会に合わせるかのように晴れ上がり、会場の「一の坊」には全国各地から二〇四人が集まりました。

今回のスローガン「このままでいいの？ニッポン・マスコミ・私たち」の通り、自分へ問いかけ、みんなへ問いかけて議論を進める中で、いろいろな答えを見つけることができたのではないでしょうか。東北地連の力を結集し、お揃いの赤いTシャツでの実行委員会運営や、女性のみならず男性も積極的に参加し、活躍されていたことも印象的でした。

＊＊＊

集いは、実行委員長の今井美香さん（東北放送労組）の「何かを行動するときの引出しを増やすと兵に、パワーを充電する二日間にしましょう」という歓迎の挨拶で始まりました。続いて労連本部の碓氷委員長と、女性協議会の神内議長から女性を取り巻く現状についての問題提起、集いの意義などに関する挨拶の後、京都放送労組の大西潤子さんから、社員化など直接雇用を勝ち取ったという嬉しい報告がありました。

そして、著作家でありジャーナリストの堤未果さんの記念講演、分科会、ワークショップ、交流会。二日目には映画監督の鎌仲ひとみさんの記念講演と盛り沢山の内容になりました。「メディアに関わるものとして何ができるか、何を考えていかねばならないのか」「立場は違っても同じような現場で同じような問題を持っている人たちが思いを共有することで、自分たちが本当に望むメディアが生まれてくる」など、これから私達がやらなければならないことを考えさせる充実した集いとなりました。

（詳細は2、3面）

講演に聞き入る参加者

第44回民放労連全国女性の集いin松島

大いに学び大いに楽しむ

充実の分科会、大盛り上がりの交流会、中身の濃かったワークショップの様子を紹介します。

分科会①

戦後60年以上たって語られる もうひとつの戦争

この分科会では、講師に金子傳さん（映画『蟻の兵隊』出演）と池谷薫さん（映画『蟻の兵隊』監督）を招いて行われました。

ポツダム宣言後も中国山西省に残り、中国の内戦を戦った旧日本軍の部隊がありました。この事実はほとんど知られていません。武装解除命令が出ないまま中国に残留し、昭和31年に帰還した金子さんは、自分が八年前に「現地解除」になっていたという事実を知り、がく然としたそうです。日本兵として中国で戦い続けたのに、日本に帰国したら日本兵ではなくなっていたのです。

「山西残留問題」の真相を確かめたい、この事実を世間に知らせたいという思いで、金子さんや映画に描かれた奥村和一さんら残留兵は、国を相手どり裁判を続けています。

「今の日本は私たちが戦争にやられたときと同じだ」と池谷監督は何度も奥村さんに聞かされたそうです。戦争中に起こった事実を明らかにせず、九条改正をしようとしている今の日本。「何がなんでも、九条を守ってほしい」という金子さんの言葉が心に突き刺ささりました。

分科会①の講師のお二人

分科会②

アサーティブネス 紹介講座

この分科会は、NPO法人アサーティブジャパン認定トレーナーの桜井ちか子さんを講師にお迎えして行われました。

アサーティブネスとは、自分も相手も大切にしながらより良い関係を作っていくということ。家族との会話に生かしたい、営業トークに生かしたい、など各々の目的を持った一七人が参加しました。

ロールプレイをしながら行われた講座では、アサーティブな会話をするときの四つの柱、「誠実」「率直」「対等」「自己責任」や、「私には間違う権利がある」「私には賢くて能力のある対等な人間として敬意をもって扱われる権利がある」といった二二の権利などが紹介されました。

参加者からは、「十人十色の考え方があるが、共感する部分もある。勇気をもって気持ちを声にだしていきたい」「言いたいことを見過ごしていたことが浮かんできた。しっかり伝えていきたい」などの感想が聞かれました。

分科会③

放送業界 男女不平等物語

この分科会で最初に投げかけられたのは「あなたは定年まで働き続ける自信があります？」という問いです。コーディネーターの九州地連女性協議会書記長（九州朝日放送労組）の藤井陽子さんに加え、男女差別に直面している人や、いまは実感がないけれど他の状況を知り勉強したいという人まで、一三人が参加してディスカッション形式で本音を語り合いました。

昇格差別や雇用形態などの格差、出産、育児、ライフスタイルなどの具体的な事例や個々が抱える悩みなどそれぞれの声を聞きました。また、男性の参加もあり、男性がどう働きかけていけばよいのかを考える意見も出されました。

法的な権利などが拡大しつつあり労働環境は整ってきたものの、依然として職を離れる女性は多く、その障害となっているのは何かを考えるとともに、先輩たちがどのように乗り越えてきたのか、経験やアドバイスを聞くよい機会となりました。忙しすぎて心も体も不健全になるなかで、今立ち止まって考えること、仲間や同じ立場の人たちとコミュニケーションをとり、語り合うことの大切さを確認しあった時間になりました。

分科会②

分科会③

ワークショップ 育児から憲法まで幅広く

日本全国 このままじゃダメだっちゃ！

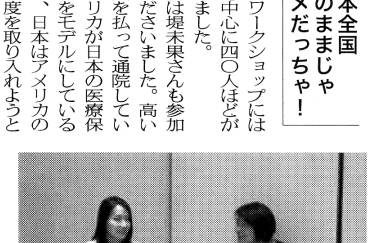
このワークショップには女性を中心に四〇人ほどが参加しました。

最初は堤未果さんも参加してくださいました。高い医療費を払って通院しているアメリカが日本の医療保険制度をモデルにしている一方で、日本はアメリカの競争制度を取り入れようとしているチグハグさ。アメリカでも、女性は男性社会のルールのなかで生きていくか、男性以上に仕事をすることでしか認められない現状などを語ってくださいました。

参加者が最近感じることとしてあげたのは「昔はアットホームだったのに、今は社員が個々で働いていて空虚な職場環境になってしまった」といった声や「昔は若い人が頑張って働いていたのに、今は若い人がすぐ会社を辞めてしまう」といった時代の変化を嘆く声。「東北は産休・育休の制度が未熟である」という指摘が上がる一方、「沖縄では女性が結婚・出産で会社を辞めるという考え方はなく、休んで当たり前で職場復帰も当然である」という地域差が明らかになりました。また、労働環境については、女性の正社員の採用が減っていて契約社員、業務委託が増えているといった変化を危惧する声もあがりました。

また、沖縄からは「憲法九条が変わってしまったら沖縄が復帰した意味がなくなる。本土の人たちは、もっと真剣に憲法九条について考えてほしい」と切実な声がありました。

憲法九条から女性の年齢に対する考え方、産休に関する職場の対応の未熟さから浮き上がる採用の問題点など、多岐にわたって思いのたけを語り合いました。


堤さんも参加してくださいました

僕が育休をとったワケ

女性が取るものといった印象が強い育児休業。さて男性は？というと、取れる制度があっても活用が進んでいないのが実態です。この会には若手から育児中の男女とそのジュニア一七人が参加しました。

まずは各局の育児休業の実態について、参加者がそれぞれ簡単に報告。育児休暇を取得したある女性は「育休中は不安があったが、周囲にとっての一年は意外にも短いものだとわかった」と報告。また、育児休業を二度とった女性は「辞めるという選択肢はそもそもなく、育児休業の取得希望を言えるかどうかで悩んだ」とのこと。この二人の共通点は「職場の環境が整っていて、育児に対して理解のある人に恵まれていた」ということです。その上で「今の社会が男性中心の社会である以上、男性が舵をとって育休を積極的に進めてほしいし、取得してほしい」と希望を語りました。

その一方で「社員の数が少なく、なかなか育休がとりにくい環境で、産休ぎりぎりまで働かざるを得ない環境まで追い込まれ、結局育休どころか会社を辞めなければならない状態にある」という切実な話も出ました。それに対しベテランの女性は「仕事を続けたい意思がある人は、少子化である今だからこそ、制度を活用して産休・育休をとるべき」と提言しました。

結論は「男性の育休取得は特別なことではない。それが当たり前となることを目指して子育ての喜びを意図的に伝え、語り、共有しよう。それによって、男女ともに育休を意識するようになるだろう」という表現でまとまりました。

育休について深く考えました

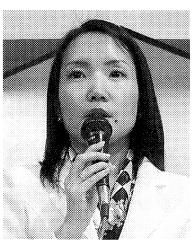
記念講演1

九条は世界の希望 ～私の国が持つ貴いもの

著作家 ジャーナリスト 堤 未果さん

堤さんは、9・11を米国野村證券に勤務中、崩壊したワールドトレードセンターに隣接する世界金融センターで経験したそうです。当時のパニックぶりや好きだった「自由と民主主義の国」の9・11以後の変貌ぶりを目の当たりにし、大きなショックを受けたといいます。「愛国心」を盾に、アメリカは一気に戦争へ向かいました。

堤さんがイラク戦争に送られた若い兵士たちの苦悩の声、そして家族へのインタビューなどの取材を続ける中で、日本が持つ「憲法九条」がいかに世界に誇れるものなのか、イラク戦争が証明したことに気づいたといいます。



堤さんは「憲法九条」が戦争を完全に放棄している点が重要だと述べ、こういった憲法は世界中でも日本とコスタリカにしかないと語りました。世界の国々のなかでも、経済力のある日本がこの憲法を持っていることが世界にとって大事なことなのだと知り、外交を粘り強く重ねて平和を実現するという「憲法九条」のもつ理念こそが、世界や時代が求めていることだと訴えました。

自身の経験と取材を通して得た実感を語る堤さんは、私たちが未来にどんな世界を残していきたいのかを考える新しい視点を与えてくれました。

質疑応答では会場からの「9・11の被災者や遺族ではなく、なぜ米兵の現状を取材しようと思ったのか」という問いに、「アメリカの内部から悲鳴が聞こえ、それが自分を動かした」と答えました。メディアに関わる者として何ができるか、何を考えていかなければならないのか。いま、改正の議論が加速する「憲法九条」、そしてアメリカとの関わりまで、その姿勢を問われた時間になりました。

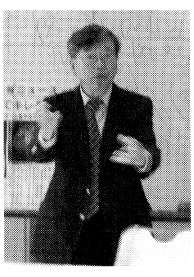
分科会④

子どもが危ない！ メディアが子どもを触む

二三人の参加者で満員となった会場で、講師の清川輝基さん（NPO法人「子どもとメディア」代表理事）ははじめに「今、日本の母親の七割が、授乳時にテレビを見たりメールを打ったりしている」という子どもを取り巻く環境について説明しました。

日本の子どもは世界一早い時期から、世界一長時間映像メディアに接触しているといいます。それが心の発育に悪影響を与えるとしたら…？例えば〝視聴率〟という言葉を辞書でひく時、紙の辞書と電子辞書では脳の動きに大きな違いが出るといいます。前者は視覚を司る視覚野に加え、人間の心を育てる前頭前野が活発に動いていますが、後者は視覚野のみが僅かに活発になるだけだそうです。

数百億の脳細胞のシナプスが形成される三歳までの間に、実体験を伴わない電子映像ばかりを見せられてきたメディア漬けの日本の子どもたち。青少年による異常犯罪とこうしたメディア漬けの関連について、ようやく研究が始まったという状況を知りました。

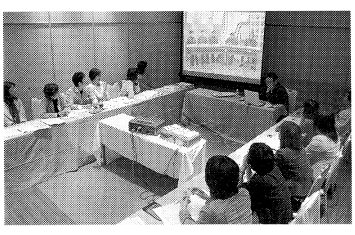

分科会④の講師は清川輝基さん

分科会⑤

視聴者主役の番組作り

東北大学大学院情報科学研究科教授の関本栄太郎さんを講師に迎え、多様化するメディアと情報の双方向性、そして視聴者である市民が作る番組について、話を伺いました。

ネットの発達やテレビのデジタル化などによって、情報の「双方向性」というものもどんどん重要性を増してきています。放送局等からの一方的な情報発信だけという時代も終わりつつあり、現在は情報を発信したいと考える市民による番組もかなり多くなってきているようです。市民が主体となり、地域の情報を自分たちで発信することにより地域も活性化するということで、実際に市民の手作りの番組VTRなどを見せていただきました。


市民制作番組を見た分科会⑤

記念講演2

見えざる六ケ所村 再処理工場の今

映画監督 鎌仲 ひとみさん

「カメラより薬を持ってきてほしい」放射能に冒されたイラクの少女ラシャの母親からの一言。「私のことを忘れないで」と言って短い生涯を閉じたラシャの言葉が、ドキュメンタリー映画監督である鎌仲さんの「大きな宿題」になり、映画『六ケ所村ラプソディー』を作るきっかけになったと語りました。鎌仲さんは、マスコミが扱うべきテーマは山のようにあるにもかかわらず、市民の想いは置き去りにされていることに悩み「誰のためのメディアなのか？誰のために番組を作っていたのだろうか？」と自問自答し続けていたそうです。私たちが生きる未来は？そしてマスメディアが果たすべき役割とは何なのでしょうか。とても気さくな語り口でありながら、私たちに深いメッセージを送る鎌仲さんの話に多くの参加者たちは熱心に耳を傾けました。

鎌仲さんは「私たちはイメージでいろいろなものを判断している。実はメディアがそれをやっているのだが、たとえば放射能レベルの問題を私たちが追及してせていただきました。

主役は市民・視聴者。「双方向性」の理念を考えたとき、ローカル局は地域住民とともに歩むという原点に立ち返らなければならないと感じました。

分科会⑥

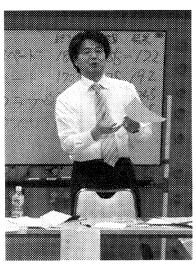
ゲームなどで学ぶ！ 自分を変える 自分に適した投資

講師にファイナンシャルプランナーの西村和敏さんを迎え、株式の仕組みなどの簡単な解説のあと始まったのは、自分たちのチームの資産価値をあげようというゲームでした。

制限時間30分で、株券の種類や数、手持ちのお金を使って取引をしました。参加者は、最初はゲームを理解するのに必死でしたが、だんだん活発に取引が行われるようになり、チームの財産を少しでも多く残そうと駆け引きが展開されました。

ゲームのポイントとなったのは、実際の資産運用に活かすことのできることばかり。時間管理、ルール＝法律の把握、情報収集、経営戦略の見極めなど。要は自分たちが知らずに持っている資産、情報をどう活かすか、ということです。

普段の自分たちが活かしていないものがたくさんあることに気づいた参加者。大切なものを見つめなおす良い機会になったようです。


分科会⑥の講師、西村和敏さん

分科会⑦

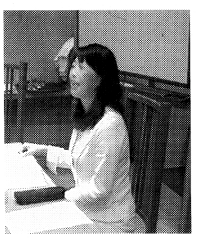
色鉛筆で 自分探し

色の力で元気になろうというテーマに魅かれた一九人が集まりました。講師はカラーセラピストの小関かおりさんです。

五つのマスを一〇色の色鉛筆の中から選んで左手で塗るキュービックセラピーは、色の持つ個性と塗りつぶしたマスの位置から、無意識の世界にある本来の自分の姿を客観的に見ることができます。

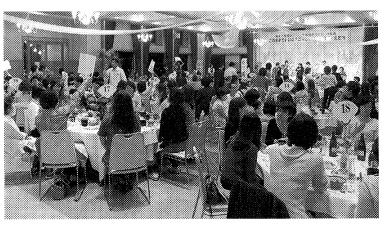
「現在」と「未来」の状況を中心に先生のセラピーを伺いましたが、不思議なことに結構当たっているもので、どきっとすることが多く、普段目をそむけがちな部分をズバリと言いあてられた感じで、会場では照れ笑いや苦笑いがおきていました。「未来」を示すバックアップカラーを毎日身に付けたり意識して見ることで、自分の生活が豊かになるそうです。洋服で採り入れるほかにも、下着や口紅などで採り入れていくのもいいそうで、皆それぞれのバックアップカラーの採り入れ方を楽しそうに話していました。

大活躍！ 実行委員のみなさん


分科会⑦の講師、小関かおりさん

あつ～い交流会

利き酒クイズに 俳句大会に…



集いの開催地の松島は、松尾芭蕉ゆかりの地であることから、即興の俳句大会が開かれました。「このままでいいの」を頭の句に、美味しい地酒でホワンッとなった頭で、思い思いの五七五を捻りました。大賞には九州朝日放送労組の佐谷恵津子さんの句「このままでいいの…よ、君の美貌と憲法九条」が選ばれ、佐谷さんには青森の地酒「田酒」が贈られました。

その後、宮城県の酒蔵の協力で開かれた地酒の利き酒大会は、予想以上の盛り上がりを見せ、なかでも講師陣の奮闘が光りました。

会場の一角に設けられた地酒コーナーで長蛇の列をなし、分厚い ホタテの鉄板焼きや牛タン焼きコーナーでも長蛇の列をなし、飲んで食べて笑って女性のパワーを炸裂させた松島の夜となりました。